KAN

# 環

柊花
2013
第9号

## 千曲川地域の人と文化

NPO法人上田図書館倶楽部　　2013 年 1 月

# 柊花（しゅうか）

心のふるさと（上田市　古安曽地区）

　雪の朝、山裾の集落では生活道確保のために雪かきが行われる。民家の庭先からは里山が続く。茅葺屋根、立て掛けられたハゼ棒、養蚕の籠が積まれた棚などが、田舎の象徴ともいえる景色を残す。

　囲炉裏で暖をとる、家族で団欒など懐かしい思いがめぐる世界である。

表紙写真・文　矢幡正夫

# contents


4　信濃の美術館を歩く
松本民芸館 ～美しいものが美しい～ ---------- 海野郁

8　千曲川地域の芸術家を訪ねる
手作り家具の店 Kancraft 羽柴完さん・羽柴弦さん親子を訪ねて
---------- 吉池みどり

11　図書館訪問記 シリーズ第６回
岩波書店出版物の殿堂 諏訪市立 信州風樹文庫
---------- 長野県図書館協会　宮下明彦

15　島尾敏雄　～南の島の図書館長として～ ---------- 海野郁

17　観点　「技術」 は 「言葉の壁」 を乗り超える ------- 岡田基幸

19　はつらつシニア　大沢年延さん ---------- 伊藤文子

22　パズル　ちょっといっぷく ---------- 萌

23　連載「「ラ・マンチャの白い風」ドンキホーテの路 ------ 桜田義文

26　連載「上田小県地域の歯科医療の源流を辿る 四」--------- 村居正雄

30　ぶらり散策 「昔の姿は?」---------- ひが

31　あとがき

# 松本民芸館

## ～美しいものが美しい～

信濃の美術館を歩く

錦繍の三才山峠は柔らかな秋の日差しを浴びて、あたかも油彩画のようだ。そこから下って美ヶ原温泉方面へと向かう。ほどなくして案内板が現れ、左折すると白壁の松本民芸館に行きつく。長屋門の先には石畳が続き、鮮やかに紅葉した木々や石造物が来館者を誘う。なまこ壁が美しい建物に一歩足を踏み入れると、そこは「手仕事の美」の世界である。

１９６２年に丸山太郎さん（１９０９～１９８５）が創設した松本民芸館は、今年開館50周

年を迎えた。丸山さんは亡くなる2年前に土地、建物、所蔵品の全てを市に寄贈し、現在は松本市が運営している。

丸山さんを民藝の道へと導いたのは、東京駒場の日本民藝館だった。日本民藝館創設者の柳宗悦（やなぎむねよし）らは、民衆の用いる日用品の美に着目し、無名の職人たちが作った民衆的工芸品を「民藝」と名付けた。丸山さんは上京するたびに日本民藝館に立ち寄り、柳宗悦たち民藝運動家の知遇を得る。民藝の美しさの虜となった丸山さんは、蒐集のため日本全国を旅する。また*李朝の品に強く魅かれ、韓国や台湾まで足を延ばした。

李朝の人形

*李朝：朝鮮の最後の王朝（1392～1910）

現在所蔵品は7000点ほど、陶磁器や木工・漆・竹製品、染織物やガラス製品など、多くは日常的に用いられていたものである。常時700～800点が展示されている。今年は通年で「松本民芸館50年の歩みと丸山太郎のこころざし」展を開催。並行して4つの特別展が企画されていて、私が訪れた際は「民芸のふるさと　李朝展」が開かれていた。李朝の民芸品550点の中から約150点が展示されている。

1号館展示室に入ると、まず一対の李朝の人形が目に入る。素朴で単純な造りながら何とも温かく、上田近辺で農閑期の農民が彫った木端人形に通ずるものを感じる。木製の戸棚などは素朴さと重厚さを併せ持ち、白磁の壺の高貴な美しさは言うまでもない。

2階への階段には、野の花がさ

民芸館庭

りげなく飾られている。丸山さんは、『野辺に生えるありきたりの花』を愛したという。庭の雑木林も、丸山さん自らが手掛けたものである。柳宗悦の写真が飾られた部屋からはアルプスが眺望でき、紅葉が映える小窓はあたかも一幅の絵のようである。

日用品の美

1965年には、松本市内にあった江戸時代の土蔵を移築し2号館とした。1号館とは別々の建物であったが、現在は改造されてつながっている。屋根裏部屋の太い梁の下には、日常的に使われていた大甕や船箪笥、野にあった石造物が存在感を放つ。吹抜け部分から階下を覗くと、そこにはくつろぎの空間がある。

丸山さんは、「ここに陳列しているほとんどの物は、名も無い職人さんによって作られた手仕事の日用品ばかり。美しい物には国境もなく新旧もありません。ただ美しいものが美しい。そう感じてもらえたらうれしいです」と語り、郷土の人にこそ見てもらいたいと願っていた。現在の館長の丸山廣登さんも、「来館者の殆どが県外の方々です。地元の人にも是非一度訪れて民芸品に触れてほしい。12月11日から来年2月24日までは、企画展『沖縄に咲いた民芸』を開

くつろぎの空間

催。紅型やティサージなどの染織物、焼物、異国情緒あふれる琉球人形など、沖縄の魅力が溢れ出てきます」と話された。「来館者用のノートもご覧になってください」。館長さんの言葉にもう一度館内に戻る。ノートには、訪れた人たちの思いがあふれていた。

『人から人へ大切に伝えられたものには愛があり、美しいですね』

『何度来ても落ち着きます。心が洗われます』

無名の職人たちが作った民芸には、華美なものなどひとつとしてない。だからこそ、人は懐かしさと共に静かな感動を味わうのだろう。

平成24年11月7日訪問　海野　郁

松本市立博物館分館「松本民芸館」
料金　大人　３００円
小・中学生、70 歳以上の松本市民　無料
開館時間　午前９時～午後５時（入館は４時 30 分まで）
休館日　毎週月曜日（休日の場合はその翌日）
年末年始（12 月 29 日～１月３日）
所在地　〒 390-0221　松本市里山辺 1313-1
電話　0263-33-1569　http://www.matsu-haku.com

## おもしろWeb

未来へのキオク
震災遺構デジタルアーカイブプロジェクト
http://www.miraikioku.com/streetview/building

東日本大震災で被害をうけた施設の外観・構内を撮影し、記録・保存・公開を行う取り組み。google ストリートビューのパノラマ写真で撮影。釜石市立唐丹小学校　大船渡魚市場　陸前高田市役所旧庁舎
大字請戸集会所　泊漁港　道の駅 高田松原　など

手作り家具の店

# Kancraft

## 羽柴完さん・羽柴弦さん親子を訪ねて

### 千曲川地域の芸術家を訪ねる

「『遠くから来て疲れたけど、このロッキングチェアに座ったらすっかり疲れがとれたよ、ありがと』と言ってもらった時は最上の喜びだったよ。この仕事をしていてよかった、と思った瞬間だったね」。今年で28回目になるクラフトフェアまつもとに癒しのロッキングチェアを出品した羽柴完さんの感想である。五月晴のあがたの森公園は出品者２５０ブース、全国から観客７万人の人出で2日間大賑わいだった。このフェアは最初クラフトマンの交流の場だったのが、いつごろからか一般客が増えて今のようなスタイルになっている。

羽柴さん親子の工房「Kancraft」は塩尻市にある。住まいは松本市で、毎日工房まで通勤している。１９４９年愛知県生まれの完さんは、１９７４年に松本民芸家具藤沢木工に入社した。６年後、松本で独立して「Kancraft」を立ち上げた。息子の弦さんは１９８０年長野県で生まれ、２００８年から「Kancraft」で働いている。

「暮らしの中に木の温もりを取り入れたいという方に、長くお使い頂ける様、無垢の木を使い、シンプルで素朴、そして丈夫な家具を一品一品手作りで受注製作しています」。これは

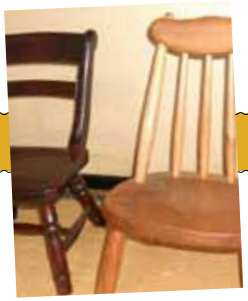
「Kancraft」のコンセプトである。

案内していただいたお住まいには、目を引く洒落た椅子が1脚、畳半畳を占めて置かれている。ある時、完さんはクラフト雑誌に掲載されたスペイン産の椅子に目をとめた。「おおお…」となって作ったのがこの椅子である。背もたれには4本の縦棒が平均して置かれ、その奥に2本の補強縦棒がある。トップは、鶏冠をかたどった滑らかなカーブをえがいた板で、2本の縦棒がアクセントになり高級感を醸し出している。

完さんが自らの作品について、誇らしげに説明して下さる。手作り家具の材料は子ども椅子の本桜・ハイチェアのくるみ・スピンドルチェアのウォールナット・テーブルのイタヤカエデ・折り畳み卓袱台の松材・抽斗の桐材など、用途に応じて使い分ける。気に入った材木を手に入れるため、時には名古屋の製材所まで足を延ばすこともあるという。単材が普通だけれど、何種類かの材料を合わせるとまた面白いものができる。時には遊び心も必要で、たとえばこの椅子はウォールナットとメープル。ウインザー椅子はニレ・イチイ・ヒッコリなどをあわせる。アメリカ産ウォールナットと会津桐などの組み合わせも面白い。

子どもの椅子は、祖父母が孫の為にと購入する場合が多い。孫が生れる度に1脚ずつ購入してくれる客もいる。ここの子ども椅子は座卓に合う高さに出来ている。愛らしく、部屋のインテリアとして購入する人も多いという。ぬいぐるみや植木鉢の台にしても洒落ている。

ずいぶん前のこと、完さん作の水屋箪笥を購入してくれた奥さんがいて、毎日まいにち隅々までからぶきしたという。新品の時より自然の艶が出てほんとう



に自分が作った作品かと目を見張るほど美しい家具になっていた。買うだけでなくその後も大切に扱っていただけると50年、１００年後には木本来の持つ美しさが出てくるだろう。孫子の代まで十分使用に耐えられ家宝にもなる。

また、すべてが手作りのため、同じものは二つとない。客には材料からデザインまで細かく指定してくる人もいれば、おおざっぱに言ってあとは君に任せるという人もいる。

注文があれば、国内はもとより、香港や台湾にも送ったこともある。いずれの場合も出来上がるまで真剣で充実した日々が続く。

完さんはカップボードや水屋箪笥など箱物が得意で、弦さんは椅子の製作が好き。完さんは「家具作りで一番大切なのは設計図で最初にデザインが決まり設計図が正確にできれば８割がた出来たようなもの。なんでもそうだけど、基本が大事。もっとも私は、設計図もなく材木に墨付けしなくても、頭の中にある完成品を製作できる」と話される。

父と同じ道を歩く弦さん、「子どもの頃父はいつも楽しそうに仕事をしていた。楽しさの中に威厳があって、僕もいつかああなろうと思っていた。同じ仕事をするようになってその楽しさを身にしみて感じている。親方（父）の言うことを聞きながら、吸収できることはどんどん吸収し、自分の感性を大切にして創造家具に挑戦したい」。穏やかながら筋の通った完さんと暖かい母の眼差しに見守られて、弦さんは未来に向けて限りなく大きな希望を描いている。

平成24年6月6日訪問

吉池　みどり

# 岩波書店出版物の殿堂
# 諏訪市立 信州風樹文庫

**はじめに**

日本の良心とも言うべき岩波書店の出版物が全て揃っている図書館が信州にあることをご存知だろうか。諏訪市立の信州風樹文庫である。

11月の小春日和の日、私はその信州風樹文庫を久しぶりに訪ねた。

風樹文庫の名は岩波書店の創立者岩波茂雄の座右の銘「風樹の歎」に由来する。中国の韓詩外伝巻九に、「樹静かならんと欲すれど風止まず　子養わんと欲すれど親待たず　往きて見るを得べからざるは親なり」とある。茂雄は少年時代に父を亡くし、青年時代に母を喪った。「海嶽の慈恩に一片も報いるところがなかったのは終生にわたる自分の恨み事。今日に至るまで父を思い、母を思って暗然たるものがある。私が多少とも世に奉仕しようとするのは、風樹の歎を自ら慰めようとするに過ぎない」と孝心を人生のバックボーンとした。（『信州風樹文庫50年』）

信州風樹文庫入口には有名な「低處高思」の偏額が掲げられている。その扁額を仰ぎながら、その日私を玄関で待っていてくれた図書館の矢崎勝美さんに招じ入れられゲートをくぐったが、林立する書架と静寂な館内の雰囲気に身が引き締まる思いがした。

## 4万点を超える戦後の岩波書店出版物が全てここに

書架の中をブラウジングして先ず目につくのが岩波書店の全集群である。『漱石全集』、『鴎外全集』、『白秋全集』、『芥川龍之介全集』、『泉鏡花全集』、『露伴全集』から最近の『幸田文全集』まで全て揃っている。

中でも岩波書店の初期の出版物の哲学叢書が目をひく。『プラトン全集』、『アリストテレス全集』、『ヘーゲル全集』、『西田幾多郎全集』、『和辻哲郎全集』、『津田左右吉全集』、『三木清全集』、『内村鑑三全集』、『福沢諭吉全集』等の書架の前に立つとなんとも圧倒される。

ところで、「真理は萬人によって求められることを自ら欲し、芸術は萬人によって愛されることを自ら望む…」という格調高いマニュフェストで知られた「岩波文庫」のお世話になった中高年世代は少なくないだろう。

この「岩波文庫」は昭和2年に創刊されたが、この出版こそは岩波の理想とプライドを賭けた畢生の大事業であった。この頃日本は「円本」と呼ばれる狂乱の全集廉価販売ブームの渦中にあったが、円本ブームに乗り遅れた出版社のアンチテーゼとして「岩波文庫」がスタートすると、A6版のハンディーな廉価版は爆発的な人気を呼び、何百通という感謝状・激励文が寄せられた。岩波茂雄をして「本屋になってよかった」と大感激させたと出版史に詳しい塩澤実信氏はその著『ベストセラーの風景』で述べている。

また、「岩波新書」が昭和13年に創刊されると他社の多くが新書版発行に追随した。昭和22年以降のこれらの「岩波文庫」、「岩波新書」が信州風樹文庫の南側壁面書架を埋め、10連近く林立する様は壮観であった。

現在、岩波書店から発行される出版物の全て、50冊～100冊ほ

「広辞苑」は初版から第6版まで全て揃っている

どが毎月ダンボールに荷造りされて送られてくるという。北隅の一角に今月の岩波書店の新刊本がテーブルの上に所狭しと並べられていた。

さらに、奥へ入ると清楚な雰囲気の閲覧席コーナーが西日に当って明るく輝いていた。矢崎さんの話では作家の井出孫六さんもこの閲覧席を愛用しており、シーズンになると原村の別荘から足しげく信州風樹文庫へ通われて来るそうだ。私も機会があったら岩波の出版物に囲まれて一日中ここで過ごしたいものだと思った。

## 向学心に燃えた中洲村の青年たち

この信州風樹文庫成立には、戦後直後の向学心に燃えた中洲村の青年たちの熱い思いと行動が伝えられている。

昭和20年8月15日を境に敗戦後の日本は価値観が一変し、民主主義が標榜されると、茂雄の出身地諏訪郡中洲村の青年たちはそれらをいち早く体得しようと熱心に本を漁った。「復員した多くの有為の若者が青年会に加わり積極的に活動した。…歴史を追う中で政治、教育、思想等の面から反省し、文化によって国を建て直そうという気運が高まっていた」そんな中、夫人が中洲村役場助役岩波卓の叔母に当る縁で東京女子大学文学部教授藤森朋夫の講演会が開催された。その講演の中で、「岩波茂雄先生のような全国的大文化人を生んだ中洲の地に、少なくとも岩波の図書が揃っているような施設がないのは残念だ」という藤森の言葉が青年たちの肺腑をえぐった。そこで、青年会長平林と副会長藤森及び文化部長の守矢は相談の結果、一つに、「藤森教授の指摘した施設が欲しい」、二つ目に「少ない優良図書に対する青年達の切なる希求に応じたい」との理由で行動を開始した。そして青年達は「直接上京して岩波書店に寄贈を懇願してみよう」ということになった。

しかしこの時、岩波茂雄は既に亡くなっていた。従って昭和22年1月に平林と青年学校教諭金子が神田の岩波書店本店を訪れたときは支配人小林勇と長田幹雄が応対した。上京した二人は自分達の心情をこもごも述べたが、小林は「岩波茂雄の郷土だからといって、岩波の本が欲しいというのは、一種のセンチメンタリズムだ。岩波の本は国内外を問わずに、真に必要とする所で利用されるべきだ」と青年達の懇請を断った。それでも二

人は諦めず、再び岩波書店に赴いた。今度は岩波茂雄の次男で後継社長になっていた岩波雄二郎が応対し、真剣な読書熱、農村文化向上、国の再建へ寄与したいという青年達の真摯な心情について深い理解を示し、終に岩波書店発行図書の寄贈について協力を約したという。（『信州風樹文庫50年』）

昭和22年に青年達が運んだリュックと本

昭和22年2月、第1回の図書受領のため、青年会の平林、吉山及び金子教諭の3名がリュックサックを背負って上京した。その後、年3回本を受け取りに上京したが、その旅費等は中洲村当局が全面支援した。

こうしてリュックサックに背負って持ち帰った岩波書店の書籍は「信州風樹文庫」の名称が付けられ当初は中洲小学校の応接室に受入れ、保管され、貸出は青年会文化部の責任で行われた。

その後風樹文庫は中洲小学校内の敷地に独立書庫が設置され、諏訪市に合併後の昭和55年に増築された。更に本格的な図書館整備の気運が熟し、平成5年7月に延べ床面積600㎡を超える諏訪市立の新信州風樹文庫が旧中洲村役場跡地に開館した。その年は岩波書店創業80周年に当り、その竣工式には当時岩波書店会長になっていた岩波雄二郎も出席した。

年間の受け入れ冊数は約1千冊で、平成24年度の蔵書数は40,581冊に達している。

## おわりに

岩波茂雄は、「自分は一介の文化の配達夫、または文化の撒水夫にすぎない」と言って、学問や芸術に専念し献身する人や、身を忘れて社会に奉仕している人に対して、尊敬し感謝する気持ちが強かった。

誠実に生き、誠意をもって仕事をする茂雄の人生や社会に処する姿勢は、生涯一貫して変わることはなかった。孝心厚く、理想家で、思い込んだら猪突猛進する正義のロマンチスト、郷土を愛し、多くの親友・知己に恵まれた岩波茂雄

こそは代表的信州人と言えるだろう。

岩波茂雄は「低處高思」を座右の銘とし、今も茂雄の生家跡には大きな自然石に盟友安倍能成の筆による「低處高思」が刻まれた石碑が建っている。岩波茂雄はこの他に「至誠而不動者未有之也」、「白鶴高飛不追群」を座右の銘としていたことを紹介してこの稿を終える。

岩波茂雄は明治14年1月8日、諏訪郡中洲村中金子に生まれた。父義質（よしもと）、母うた。戦後初の文化勲章を受賞した直後の昭和21年4月、熱海惜樑荘にて再度の脳出血にて発病し、25日に没した。享年65歳。

平成24年12月

長野県図書館協会　宮下明彦

## 島尾敏雄　～南の島の図書館長として～

昭和19年、後に作家として名を成す島尾敏雄は、第十八震洋特攻隊隊長として奄美諸島加計呂麻島（かけろまじま）に赴任した。そこで島の小学校教師ミホと恋に落ちる。戦時下における極限の愛だった。死を覚悟した島尾だったが、翌年8月13日の出撃命令は遂行されず、終戦を迎える。ふたりは結婚し上京するが、心を病んだミホのため、島尾は家族を連れて昭和30年に奄美大島へと移住する。

昭和33年、奄美大島の名瀬市（現在の奄美市名瀬）に鹿児島県立図書館奄美分館が開館した。当初は奄美諸島1市13町村唯一の図書館だった。初代分館長には島尾敏雄が就任。島尾は熊本商科大学に通って司書資格を習得した。鹿児島県立図書館長だった久保田彦穂（椋鳩十）の指導もあり、

島尾は図書館人として力を尽くすことになる。中でも最大の功績は、郷土資料の蒐集や刊行活動にある。奄美分館は郷土資料センターとしても島民に大きな影響を及ぼした。また、当時としては先駆的な日曜日開館や、離島の教育委員会や公民館、港の待合室や船内にも貸出文庫を設置するなどした。

島尾は分館長として定年まで17年間務め、奄美での生活は20年に及んだ。その間、作家活動と分館長の業務を峻別しながら、『死の棘』など多くの著書を執筆している。

先日、初めて奄美大島を訪れた。11月の奄美は観光客が少なく、気温20℃の中を快適に歩いた。島尾たちが住んでいた官舎は保存され、文学碑が建つ。２００９年にオープンした4階建ての鹿児島県立奄美図書館1階には「島尾敏雄記念室」があり、島尾の文学の軌跡や島での活動を辿ることが出来る。著書や原稿、写真などの他、島尾が分館長時代に使った机や、再現された官舎内部など、島尾の人生を網羅した展示になっている。また、奄美大島の最南西端にある瀬戸内町立図書館にも島尾敏雄コーナーがあり、前庭には立派な文学碑が建つ。

加計呂麻島へのフェリーには、小さいながら図書館貸出文庫があった。また、震洋隊の基地があった呑之浦には、島尾敏雄文学碑公園がある。文学碑の上方には「島尾敏雄・ミホ・マヤ　この地に眠る」と彫られた墓碑が建つ。マヤはふたりの長女である。立ち寄った本屋や奄美空港の売店にも島尾のコーナーがあった。飾らない人柄の島尾は、島民に愛され慕われていたという。その一端に触れた旅であった。

海野　郁

日本図書館文化史研究会編
『図書館人物伝』参照

フェリー内貸出文庫

## 観点

### 「技術」は「言葉の壁」を乗り超える

昨年の 11 月 12 日から 1 週間、上田市（旧丸子町）の姉妹提携都市である米国のコロラド州ブルームフィールド市を訪問してきた。訪問団員は旧丸子町の堀内元町長と製造業経営者 5 人と私の合計 7 名である。これまでは、文化・教育交流が主であったが、先方から、ぜひ経済交流をとの呼びかけがあり実現したものだ。米国は、日本同様にイノベーションの発信国であり、生産拠点、消費拠点の東アジアとは異なり、米国の産業動向や企業との連携を模索することは、上田地域の製造業にとっても大きな価値となる。

ブルームフィールド市はロッキー山脈の麓の米国中西部にあり、国際空港のあるデンバーが最寄りの中核都市である。標高は約 1600m で、マラソン選手の高地トレーニングで有名なボルドーにも近い。ロッキー山脈の景色が実に見事で、山に囲まれて育つ信州人には親近感のある土地柄である。米国は各地を訪問したが、ぜひ、プライベートでも訪問したいものである。

ホテルに用意されていた
ウェルカムドリンクと軽食

さて、本題の経済交流であるが、何よりも実に良き受入で感謝感激である。到着日、ホテルの部屋には、到着時間が遅くなることを見込み、写真のようなウェルカムドリンクと軽食に加え、歓迎の手紙も添えてあった。また、翌日からは、ブルームフィールド市職員の案内で朝

から夕方まで、企業や研究所の視察訪問をしてまわった。日本のビジネス慣習とは異なり、米国では、ビジネスにつながらない工場見学などは受入してもらえないのが普通であり、相手の名刺は相手に認められて初めてもらうことができる。一方では、社歴、資本金、従業員数などにはこだわらず、イノベーションにつながる技術獲得を目指し「御社は何ができるか、御社にはどんな技術があるのか」の点を質問してくる。このような経験を、企業経営者が直にできたことは大きな財産となる。

これまで、数々の国の企業を視察してきたが、「技術」は「言葉の壁」を乗り超えると確信した。米国の工場に一旦足を踏み入れれば、経営者達の眼が一瞬にして変わるのだ。製品の完成度、製造装置、5S( 整理・整頓・清掃・清潔・しつけ ) の実施度など言葉が直接通じなくとも、理解ができるのである。次回は、ぜひ米国の企業の上田市の企業視察の受入をお手伝いしたい。

ブルームフィールド市内の製造業を見学

財団法人上田繊維科学振興会　理事
信州大学繊維学部　特任教授・工学博士　岡田基幸

# はつらつシニア

## 大沢年延さん

上田市小泉在住の大沢年延さんの誕生日は昭和7年1月1日、年が明けて81歳を迎えた。元旦生まれの大沢さんは意欲的な男性である。8反の田んぼで米を作り、リンゴやブドウなど10種類ほどの果樹を育てる。果物栽培はそれぞれ作業が異なり、かつ1種類につき幾つもの工程がある。それらを、時期に合わせて適切にこなしていく。野菜は言うまでもなし、春から秋まで葉物、果菜、根菜などを育てる。ここまで聞いて、野菜栽培だけで精一杯の私は早くも脱帽、身が縮まる思いがした。他にシイタケやクリタケなど4種類のキノコを育て、ほぼ自給自足の生活を送る。

栽培方法にもこだわる。米は稲架の天干し、ブドウは家の南側の庇沿いに棚を設け、その上で育てる。日よけと実益を兼ねたエクステリアとなっている。また接木の名人で、1本の和ナシに中手の洋ナシとアキヅキという晩生の種類を接いで、次期をずらして食べられるようにしている。

３年前からは菊作りを始めた。３本仕立て、１本仕立て、盆栽仕立てなど数種類に取り組む。３本仕立ては春に出てきた新芽を切り取って挿し、８センチ位のときに摘心する。出てきた脇芽を３本だけ上へ上へと伸ばしていく。そして秋に大輪の花を咲かせる。菊展に出品するときは規定の高さにしなければならない。抑制剤を使って調整するが、気候に左右されがちな植物の生長を日々見守る愛情が欠かせない。

大沢さんお気に入りの
盆栽仕立ての菊

盆栽仕立ても挿し木から育てるが、１本の木のように形作っていく。２～３年かけて少しずつ樹姿を整え、自然の雅趣を表現していく。大沢さんはどちらかというと、盆栽仕立てのほうが好きだそうだ。自分のイメージ通りに仕立てられたときが最高の喜びと言う。

ゴルフ歴も長い。年に数回ゴルフ場に出かける。「リフレッシュできるのがいい」と地区の定例コンペには毎回参加する。大沢さんの姿勢の良さと軽いフットワークに納得した。

去年からしめ飾りも作り始めた。外仕事が終わる12月になると、お仲間と一緒に作業場にこもり、手と口を動かす。コミュニケーションが広がるときでもある。でき上がったしめ飾りは、写真の通りハイレベルなもの。ここでも大沢さんのセンスと器用さが光る。

他にも高山植物のコマクサを種から育てたり、イワヒバを枯山水風に仕立てたり、新しい挑戦は続く。しかし相手は戸外の生き物、自然環境の影響を受けやすいので、順調にいかないことも多々ある。そんな時の大沢さんの口癖は「今年ダメでも来年がある」。常

に前向きである。

奥さんの時江さんも活発である。花や野菜はほとんど種から育てる。ご主人と一緒に生産した果物や野菜の加工は一手に引き受け、毎日の食卓にのせる。レシピもインターネットで検索して、料理がマンネリにならないように努める。また9年前からパソコン教室に通い始めた。ペイントソフトを使って、カラフルな色彩とともにドローイングを楽しむ。

揃って意欲的なお二人、話題は多岐にわたり尽きることがない。聞いているこちらは60代半ば、一回り以上も年長のお二人にエネルギーをたくさんもらって取材を終えた。

平成24年11月9日訪問

伊藤　文子

もてなしの街角（上田市　松尾町通り）

上田駅から松尾町通りをウォーク。石畳を思わせる歩道、空に向かってかざされたモダンな街灯。新しい街並みの中、洋風の建物が日差しを受け、ひと際存在感を見せている。老舗の商家ここにあり。

写真・文　矢幡正夫

# パズルコーナー ～ちょっといっぷく～

## 漢数字パズル

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 人 | 3 | 役 | | 6 | 12 | 4 | 川 |
| 問 | | 人 | | 本 | 国 | | 和 | |
| 1 | 日 | 8 | 秋 | | 10 | 甲 | 田 | 山 |
| 答 | | 脚 | | 11 六 | 4 | | 湖 | |
| | 太 | | 箱 | 根 | 10 | 里 | | 1 |
| 7 | 4 | 7 | 折 | | 箇 | | 台 | 風 |
| 4 | | 7 九 | | 大 | 所 | 高 | 所 | |
| 7 州 | | | 直 | 角 | | 原 | | 5 |
| 里 | | 倒 | 立 | | 28 唯 | | 端 | 2 |
| 浜 | 辺 | | 3 | 天 | 1 | 流 | | 調 |
| | 地 | 下 | 足 | 袋 | | 言 | 葉 | |
| 3 | | 国 | 歩 | | 雄 | 飛 | | 12 |
| 9 | 里 | | 行 | 楽 | | 語 | 学 | 力 |
| 3 | | 4 | | 日 | 1 | | 芸 | |
| 4 | 中 | 10 | 7 | | 年 | 会 | 員 | 証 |
| 日 | | 番 | | 車 | 中 | 談 | | 人 |

★空欄には漢数字が入ります。
★同じ番号には同じ漢数字が入ります。

連載

# ラ・マンチャの白い風

桜田義文

## ドンキホーテの路

カンポデクリプターナにて　　桜田義文２００５年　　水彩画

スペインのラマンチャといえばすぐ思い起こすのはドンキホーテだろう。セルバンテスがこの物語を出版したのが一六〇五年、およそ四〇〇年前のことだ。以来キリスト教の「聖書」を除けば世界で最高の出版数をほこるといわれるほどの超ベストセラーである。

２００５年にラマンチャを放浪していたとき、「ドン・キホーテ四〇〇年祭」が開催されていて、どこへいっても「ドンキホーテ４００」の緑色のポスターやみちしるべがあって、ホテルには「ルータ　デ　ドンキホーテ」の地図が置かれていた。ラマンチャの地図上にドンキホーテがたどった路が緑色に表示されているためレンタカーで走っていても四〇〇年前のルートをほぼ追いかけることができる。田舎の舗装もされていない

小道で「ルータ・デ・ドンキホーテ」と書かれた緑色の案内板をみつけるとうれしくなってしまう。

ラマンチャのど真ん中にカンポ・デ・クリプターナという小さな町がある。前回「地平線の見える風景」でご紹介したコンスエグラから東へ四〇キロ、国道４２０号線に面してある。この町の背後の丘には二〇基ほどの風車がある。昔は三〇基以上あったというが、この風車群こそドンキホーテが巨人の軍隊とおもって突撃する舞台で、無残にもはじきとばされはするが、この小説のユーモアと悲哀と強烈な風刺を表現する代表的な場面となっている。

たとえばこの風車の場面であるが、頃は一五〇〇年代の後半、スペインが七〇〇年かけてレコンキスタ（国土回復戦争）とよばれる長い戦いのすえ、イベリア半島からイスラム教徒であるモーロ人たちを追いだし、羊飼いであるキリスト教の国を立ち上げてようやく一世紀、その間にコロンブスはアメリカ大陸を発見し、コンキスタドール（征服者）たちは新大陸をめざした。トルフィーヨというちいさな町のピサロはたった一八〇人の軍隊でインカ帝国を破り、インカ人とアフリカからの黒人たちを奴隷としてこきつかい膨大な金銀財宝をスペインに持ち帰った。日の沈まない国スペインはまさに絶頂期にあった。しかし時の国王たち（カルロスⅠ世やフェリーペⅡ世）は国の建設などにはなんの興味を示さず、十字軍などの浪費に明け暮れたためせっかくの金銀財宝はスペインを素通りしてヨーロッパにばらまかれるばかり、そんな時代背景の中でこの物語はすすめられてゆく。

さて風車の話だが、カルロスⅠ世はフランドル（現在のオランダあたり）から婿入りしたスペイン語も話せない王さまで、国から多くの家臣たちを引き連れてきた。この家臣たちが大変な欲張りでスペイン国家のなけなしの金を懐に入れせっせとフランドルに送ったため国民から目の敵にされていたという。そのフランドルの象徴が、その頃フランドルから入ってきた風車であったというわけだ。ドンキホーテはこの憎むべき風車に無謀にも突進し突き飛ばされてしまうのだが、当時のスペイン人たちはこのシーンに拍手喝采し、同時に自分たちのくやしさを胸にしまいこんだというのだ。

現在のカンポデクリプターナの風車群は、遠くから見るとたし

かに巨人の軍隊に見えなくもない、あるいはフランドルからつれてきた欲深い腹の出た悪代官たちにもみえる。正義の味方にしては老いぼれで、かなり被害妄想狂で、よわよわしいドンキホーテではあるが、あるいはそれだけにいまだに正義の味方としてスペイン人たちに愛されているのだ。

ドンキホーテはセルバンテスが書いたフィクションではあるが、ラマンチャの「ルータ・デ・ドンキホーテ」の標識を追いかけてゆくと、生誕の地や泊った宿屋や想い姫ドゥルシネーヤの住むエルトボーソの町などにたどりつく。こうしたゆかりの地ではもちろんドンキホーテのおじさんはいまだに生きているのだ。

漢数字パズル　こたえ

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 一 | 人 | 3 二 | 役 | | 6 四 | 12 万 | 4 十 | 川 |
| 問 | | 人 | | 本 | 国 | | 和 | |
| 1 一 | 日 | 8 三 | 秋 | | 10 八 | 甲 | 田 | 山 |
| 答 | | 脚 | | 11 六 | 4 十 | | 湖 | |
| | 太 | | 箱 | 根 | 10 八 | 里 | | 1 一 |
| 7 九 | 4 十 | 7 九 | 折 | | 箇 | | 台 | 風 |
| 4 十 | | 7 九 | | 大 | 所 | 高 | 所 | |
| 7 九 | 州 | | 直 | 角 | | 原 | | 5 七 |
| 里 | | 倒 | 立 | | 28 唯 | | 端 | 2 五 |
| 浜 | 辺 | | 3 二 | 天 | 1 一 | 流 | | 調 |
| | 地 | 下 | 足 | 袋 | | 言 | 葉 | |
| 3 二 | | 国 | 歩 | | 雄 | 飛 | | 12 万 |
| 9 百 | 里 | | 行 | 楽 | | 語 | 学 | 力 |
| 3 二 | | 4 十 | | 日 | 1 一 | | 芸 | |
| 4 十 | 中 | 10 八 | 7 九 | | 年 | 会 | 員 | 証 |
| 日 | | 番 | | 車 | 中 | 談 | | 人 |

れんさい

# 上田小県地域の歯科医療の源流を辿る　四

日本歯科医学史学会会員
元海野町歯科診療所長
村居　正雄

## 入歯師の誕生

この連載の第１回で触れたように、明治中期以前、地域の人々の歯の悩みに応えていたのは、口中医あるいは入歯師、歯抜きといわれる人たちであった。口中医は医師の一科で、丹波氏一族が宮中の典薬（侍医）を務める傍ら、代々世襲制で朝廷や幕府に仕えて口腔内の諸病の処置をした。その治療範囲は投薬、針灸、抜歯や膿瘍の切開ぐらいで、義歯（入歯）については手をつけていなかったようである。室町時代後期（１５３０年頃）から江戸時代初期（１６００年頃）には義歯を作ることを専業とする者が出てくる。藤村隆水のように仏師と兼業で義歯を作っていた者や、手先の器用な根付師で、より実入りの良い入歯師に転向した者もいた。

彼らは義歯を作ることを専業とし、「入歯師」「入歯渡世者」と呼ばれていた。そして義歯を作る傍ら見様見真似で口中療治や口中薬を売る者を「歯医師（はいし）」と呼んでいた。しかし多くの「入歯師」は全く医学の教育を受けていない素人で、抜歯後の出血多量や感染症で亡くなる人もいた。

義歯を作る技術の習得は、老巧な入歯師の下に弟子入りして、その業を習い、師弟の関係というよりは親分子分の関係だったという。彼らの技術は、修行による熟練と、多年の経験によって得たものであった。この組織が香具師（やし）、あるいは的屋（てきや）と総称された人たちの集団だった。

彼らは道具を持って全国を旅し、ある町に一定期間留まって仕事をした。香具師の一部は、寺院の縁日や広場などで芸を披露しながら薬や歯磨き粉を売った。旅の途中、泊った宿で地域の住民や客の注文

黄楊の上下総入歯。上田町で3人目の歯科医師として明治35年新参町で開業された小林清吾先生からご子息の正平先生へ、そして正平先生が千葉県に転居された時に親しくしていた私の父が預ることになった貴重な資料である。前歯が黒いのはお歯黒で、女性が使用していたことがわかる。奥歯には磨耗を防ぎ、咀嚼能率を高めるために丸頭有釘（ケンピン）が打たれている。この入歯は、木床部分がかなり磨り減っていて使い込まれていたことがわかる。

に応じて歯痛を治療し、入歯も作ったであろう。

ほぼ同時代の木製義歯が大阪と東京で出土している。作られたのは１６６０年頃と推定されている。東京の義歯の持主は柳生飛騨守宗冬で、徳川５代将軍綱吉の剣術指南役として１万２千石の高禄を食んでいた人物である。延宝３年（１６７５年）63歳で没していて、下谷稲荷町にあった廣徳寺が菩提寺であった。区画整理による墓地の改葬があったとき、宗冬の墓の棺の中から上下の木床総義歯が発見された。義歯の材料は黄楊（つげ）で、歯の部分は蝋石が埋め込まれ精巧に作られたものであった。

## 入歯師川上喜作のこと

海野町から映劇方向に曲がる角に川上毛糸店がある。この場所で

江戸から明治時代にかけて入歯師川上喜作が活躍していたと記録にある。4年前にご当主の川上喜男氏を訪ねて喜作について話を伺ったのだが、残念ながら家を改築した際に古いものを全て廃棄してしまったという。唯一看板が残っており、写真を撮らせていただいた。実はこの看板の裏側は煙草の宣伝で、煙草屋も兼ねていたことがわかる。現在川上家のお墓は、大門町の願行寺にある。お参りをさせていただいて、喜作の名前を確認した。墓碑には、大正4年に82歳で亡くなった喜作と、昭和15年76歳で亡くなった四代目喜作の名前が刻まれている。従って前者が三代目ということになる。初代、二代目については未だ不明で、いつから、どこでどのように入歯師として仕事をしていたのか、と謎は深まる一方である。

川上喜男氏と入歯師喜作の看板
裏側は煙草の看板

私は四季折々太郎山に登って上田の街を眺め、自然を楽しんでいる。大星神社に参拝し、四十八曲がりの急坂を登って、表参道と出会うところに一の鳥居がある。石造りの巨大な鳥居は、紀元２５３７年建立とある。明治10年である。こんなすごいものを、どうやってここまで運び上げたのかと当時の人々のエネルギーと信仰心には感心する。柱に寄進者の名前が刻まれていて、海野町で商いをしていた人々の名前が並んでいる。私の曽祖父である小川七兵衛の名前があることは以前から知っていた。門石長秋について調べ始めた頃、曽祖父の隣に川上喜作の名前を発見したときには驚愕し、また不思議な因縁を感じた。当時いくら寄進したのであろうか、興味は尽きない。頂上の太郎山神社の脇の石柵にも喜作の名前を発見し、一人悦に入っている。

太郎山一の鳥居と寄進者として刻まれた川上喜作の名前

## 入歯師の終焉

明治18年内務省通達により、医術開業試験に合格しなければ医師・歯科医師として開業できないことになった。それ以前に開業していた人たちに対しては、県知事が鑑札を発行して許可した。明治39年の調査によると、入歯歯抜口中療治鑑札所有者は長野県下に29名おり、上田町では川上喜作、相原定重、鈴木清助、小県郡下では、堀田茂兵衛、高森徳太郎の名前が記録に残っている。

明治30年、上田町に門石長秋が開業し、続いて33年に三瓶茂吉、35年小林清吾、41年小林豊と資格を有する歯科医師が次々と開業する。欧米から新しい技術や材料が導入されると、明治中期以後木製義歯は消えていく。明治36年、県内の歯科医師は16名となり、全国的な組織として日本歯科医会長野県支部が誕生する。初代支部長は門石長秋で、その目的の一つは非歯科医師取締りを主張することにあった。

明治末期、四代目喜作は入歯師を諦め、現在の映劇の場所で末広座という芝居小屋を経営していた。長男を日本歯科医専に入学させ歯科医業の継続を願ったが、残念なことに卒業を目前にしてスペイン風邪に罹り亡くなったという。大正7年のことであった。その後養子菊二を迎え、毛糸販売業に転業している。（つづく）

川上家の墓碑

〈参考文献〉
解読復刻版・長野県歯科医師会史　第1巻　長野県歯科医師会　昭和11年
江戸の入れ歯師たち―木床義歯の物語　長谷川正康　一世出版　平成22年
歯の神様〈信州における入歯師P123-160〉　神津文雄　銀河書房　平成3年
入歯師　長野（長野郷土史研究会機関誌）76号　神津文雄　昭和52年

## ぶらり散策

「昔の姿は?」

上田菅平インターチェンジの脇にある、小高い山は「玄蕃山」といい、地域の憩いの公園になっています。山と言っても、丘程度のすぐ登れる小さな山です。頂上からは周辺の見通しが良く、神科地域が一望でき、砥石・米山城も良く見えます。ということは、記録にはありませんが、戦国時代にここに見張台があったことは想像に難くありません。嶺伝いに少し東に行った先には「陣場」という地籍名もあり、当時は鎧の武者が歩き回っていたのかもしれません。上田城址で叩く陣太鼓の音もしっかり聞こえ、若き日の真田幸村も立ち寄ったかも知れません。

玄蕃山の名称は、ここに仙石氏の家来、荒木玄蕃の墓があることからですが、徳川幕府の時代には平和になり、見張り台の必要が無くなったので、ここに墓を建てることが可能になったのでしょうか。現在は桜が植えられ、春にはきれいに咲き誇ります。戦国の面影はもうありません。（ひが）

## あとがき

昨秋、上田情報ライブラリーと共催で文章講座を開いた。日頃、文章を書く機会は多い。だが満足いく文章がなかなか書けない、文章力をつけたい、そんな思いから企画した。講師は上田女子短大の非常勤講師で作家でもある嶋田貴美子さんにお願いした。メインテーマは「心にひびく文章の書き方」とし、３回シリーズで実施した。この講座は受講申し込みが予想外に多かった。定員に達してからも電話が相次ぎ、「書くこと」への関心の高さを感じた。

１回目のテーマは「文章を書くということ」。まずは文章構成の基本を知り、１文１メッセージの簡潔な文の書き方について学んだ。「ありふれた言葉を避ける。言葉の概念を正確に把握する」などの説明があった。

２回目は「心の言葉を豊かにする」。「自然と対話できるように五感を磨く。非日常の体験の積み重ねがいい文章を書く基礎となる」など内面的な部分に焦点が当てられた。

３回目は「良い文章を書く」。「有機的な生きた言葉を使って自分の感動を伝える。そのためには文章を書くときの集中力と強い動機付けが大切。命と心と言葉は一体である」と言葉の神秘性に迫った。

全体を通して特に印象に残ったのは、「五感を磨く」と「書くときの集中力」である。精神力が文章力につながると強く認識した。

人間にとって呼吸の次に大切なのは言葉だと聞いたことがある。言葉で思考を繰り返し、言葉で他者とコミュニケーションをとる。空気と同じように人間には欠かせない存在、そんな言葉に真摯に向き合ってきただろうか。安易だったこれまでを反省しながら、「心にひびく文章を書く」というゴールに向かって、長い道のりを歩き始めた。　（木漏れ日）

環スタッフ：　伊藤文子　海野 郁　西入幸代
東方明子　宮下明彦　矢幡正夫　吉池みどり

環（かん）　千曲川地域の人と文化　　第９号　　柊花
２013年１月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部

表紙及び文中の写真は無断使用を禁じます